「ASK?映像祭 2020」総評

西村智弘

もともと ASK?映像祭のコンペティションは、応募数が決して多いといえないのだが、今年はコロナの影響もあって明らかに減少傾向にある。しかしわたしは、全体的な作品レベルは決して下がっていないと思うのだ。むしろなかなか健闘しているだろう。とはいえ、これが大賞だと自信をもって勧めることができるような突出した作品がなかったのも確かである。そのため今年の ASK?映像祭は、少なからず混迷したところがあるといえるかもしれない。

今年の ASK?映像祭は、コロナの影響によって大幅に変更を余儀なくされている。受賞作品の上映会が中止になって、その代わり無料のループ上映をおこなうことになった。また授賞式や懇親会も中止になり、昨年の大賞作家の個展も開催されない。コロナは収まったかと思うとぶり返して、いまのところ終息する気配を見せない。はたして来年の ASK?映像祭は通常どおり開催できるであろうか。

大賞作品は、結果的に西尾秋乃の『escape』が選ばれた。合成などを駆使して白昼夢的な世界を描いた作品である。この作品を大賞を推したのは久里洋二氏である。わたしはこの作品にノーマークで、まったく評価していなかった。久里氏はいいだしたらきかないところがあって、押し切られるかたちで大賞になってしまった。改めて見返してみるとそれなりにおもしろい作品だと思ったが、大賞にふさわしかったかどうかはよくわからない。

久里洋二賞に選ばれた瀬尾宙の『anipulatio』は、よくできたカートゥーン・アニメーションで、わたしはこの作品を高く評価している。日常的で些細なエピソードが微妙に関連しあいながら進んでいく作品である。メタ的な視点を取り入れ、知的に構成された作品に仕上がっていた。

西村智弘賞には川上喜朗の『蛍火の身ごもり』を選んだ。少年が妊娠して差別される話のアニメーションで、ジェンダーの問題を含め現代的なテーマといえよう。しかし、わたしが感心したのは作画である。一見するとイラスト調の絵なのだが、ディテールがとても凝っていて丁寧に仕上がっていた。わたしはここに、この作家の力量とアニメーションの可能性を感じたのだった。

ASK?賞となった川畑那奈の『ONE WORLD』は、わたしが個人的にとても気に入った作品で、西村賞をこれにしようかと迷ったぐらいである。わたしはこの作品の独特のセンスのよさを評価したい。視点が移動するだけでひとつの世界観を表現しているところがすごいと思った。この作家が今後どのような作品を制作するのかわからないが、今回の作品がもつ新鮮さを失わないでほしいと思う。

村岡由梨は、どこかシュルレアリスム映画を思われるスタイルで、セルフ・ポートレイトをつくる作家で、以前にも ASK?映像祭で入選したことがある。新作の『透明な世界』は、写真を多用し、彼女らしい幻想的な世界を描いていた。村田香織も力量のある作家で、ASK?映像祭で受賞した経験をもつ『わたしたちの家』は、即興的な絵によってさまざまな愛のかたちを描いたアニメーションであった。

中村匠吾の『COMET』は、短いながらも完成度の高い人形アニメーションである。ある惑星に不時着したロボットをめぐって、哲学的な思索を詩的に描いている。北林豪の『Myself』もロボットが主人公のアニメーションである。ただしこちらは、人間的なやさしさを感じさせる作品に仕上がっていた。ラストの線画で表現されるシーンがおもしろい。

平松悠の『ひなんて、なくなってしまえ』は、ひらがなの「ひ」に翻弄される主人公をミュージカルで描いたアニメーションである。日常的で些細なエピソードがミュージカルで大げさに表現されているところが笑える作品である。くりたもねの『ブラジャーねこ』は、キャラクターを猫にすることで、異性装の問題をユーモラスに描くことに成功している。決して達者な絵ではないが、勢いで納得させられる作品であった。

門井建の『瓢亭』は、とんかつ屋のドキュメンタリーである。丁寧につくられており、NHK で放映されてもおかしくないほどだ。正攻法でストレートに撮影しているところに好感をもった。